

## 本号の表紙について ——ハイデガーの生地メスキルヒ——

本号は哲学会第 60 回研究発表大会ワークショップ「ハイデガー哲学の政治性」（2021 年 10 月 30 日、東京大学、Zoom で開催）でなされたふたつの報告を掲載したので、表紙には、ハイデガーの生地メスキルヒの、ハイデガーが思索にふけりながらしばしば散歩したという「野の道」の写真を用いた。2021 年夏に撮影したものである。

ハイデガーはその論稿「野の道」（Feldweg）をつぎのように始めている。

その道は、城の庭園の門からエーンリートへと続いている。その道が、復活祭の時節であれば、萌え出でつつある苗と育ちつつある牧草とのあいだにかがやき、あるいはまた、聖霊降誕祭のころであれば、最も近い丘の陰の雪だまりの下へと消えていく、そのいずれの時節にあっても、城の庭園の菩提樹の老木たちがその道を塀越しに見送っている。野に立つ十字架のところから、道は森のほうへと曲がっていく。道は折り返しを過ぎるところで一本の高いオークの木にあいさつし、そのオークの下には一脚の粗削りに作られたベンチがある。<sup>1</sup>

メスキルヒはシュヴァルツヴァルト（黒い森）のなかの小さな町。ハイデガーはアルバート・シュラーゲーター<sup>2</sup>を讃える演説<sup>3</sup>のなかでシュラーゲーターと自分にとって共通の故郷であるシュヴァルツヴァルトについてこう述べている。

シュヴァルツヴァルトの山と森と谷、あの英雄の故郷に足を踏み入れるとき、山は原成岩、花崗岩であって、これに囲まれてあの若い農夫の息子が成長したことを、身を

---

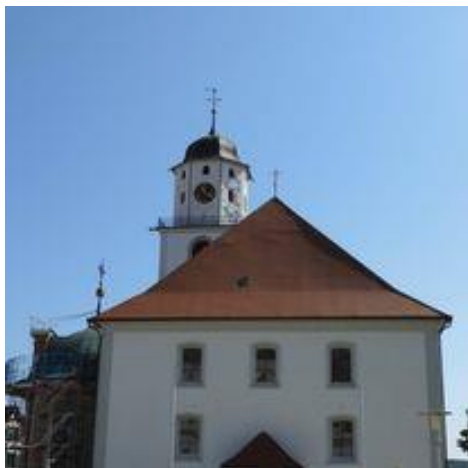
<sup>1</sup> Heidegger, Martin, *Der Feldweg*, Vittorio Klostermann, 1978, S. 1. 訳文は品川による。

<sup>2</sup> 第一次世界大戦に志願してベルギーのイープル、フランスのヴェルダンなどでの戦闘に参加。鉄十字章を授与され、少尉。戦後は右翼の義勇軍（フライコール）に参加。フランスに占領されていたルール地方のサボタージュに関わる。1923 年に鉄道を爆破し、フランス軍に逮捕され、死刑となった。ドイツ右翼によって英雄として讃えられた。

<sup>3</sup> 1933 年 5 月 26 日にシュラーゲーターの命日に催された大学の式典で、ハイデガーはフライブルク大学学長として彼を讃える演説をした。

もって知ってほしい。これが昔から意志の強さを作り上げているのである。<sup>4</sup>

実際、シュヴァルツヴァルトには黒みがかった緑の針葉樹に覆われた峻厳な岩山が作り出す狭隘な谷の中腹を鉄道が走る地域がある。しかし、メスキルヒのあたりはゆるやかな起伏が波打つ、柔らかな景色が広がっている。



メスキルヒの人口は、現在、約 8,300 人。鉄道からは離れており、ジークマリンゲンの鉄道駅から 1 時間に 1 本程度のバスが通じている。その小さな町の中心に、ハイデガーがそれにちなんでそのファースト・ネームを命名された聖マルティン教会がある（左の写真）。メスキルヒは、1870-80 年代にカトリック内部の闘争が激化した土地だった。ローマ教会よりも国家のほうにいつそう忠実で教会の近代化をめざす旧カトリック派がより豊かな層の支持を受

けて力を得、聖マルティン教会の使用権を政府に認めさせた。村の貧しい層は旧カトリック派と対立するローマ派を支持した。ハイデガーの家もそうである。ローマ派は旧カトリック派との共同利用を嫌って聖マルティン教会とは別に臨時の教会を建てた。だが、旧カトリック派はその後激減する。1895 年に聖マルティン教会はローマ派の手に戻り、樽職人でもあったハイデガーの父親が教会の財産を管理する職を勤めた。教会の委譲のさい、旧カトリック派の管理人は教会の鍵を教会の庭で遊んでいた、次の管理人たるべき樽職人の長男である 6 歳のマルティンに渡したといわれている<sup>5</sup>。

マックス・ミュラーによれば、ハイデガーは教会のなかでいつも聖水を受けて片膝をついて祈る姿勢をみせた（右の写真は、聖マルティン教会の



<sup>4</sup> シュネーベルガー、グイード、『ハイデガー拾遺——その生と思想のドキュメント』、山本尤訳、未知谷、2001 年、83 頁。

<sup>5</sup> ザフランスキー、リュウディガー、『ハイデガー——ドイツの生んだ巨匠とその時代』、山本尤訳、法政大学出版局、1996 年、16 頁。

内部)。カトリックから離反したはずの彼のしぐさとしては不思議に思われるのでミュラーがそのことをいうと、ハイデガーは「多くのお祈りがなされた場所には、神々しいものがまったく特別な仕方で見ている」<sup>6</sup>と答えたという。

教会の裏手の広場に面して、ハイデガーの生家が残っている（右の写真。三軒ある家のまんなかの家）。



教会と向かい合うようにして、メスキルヒの城館が建っている。1557年にフローベン・クリストフ伯爵によって礎石が置かれ、数年かけて建てられたルネッサンス様式の城館で、くわしくいえば、その後南ドイツに広まる4つの塔をもったカスペル（城砦）と呼ばれる様式のごく初期のものである（左の写真）。こ



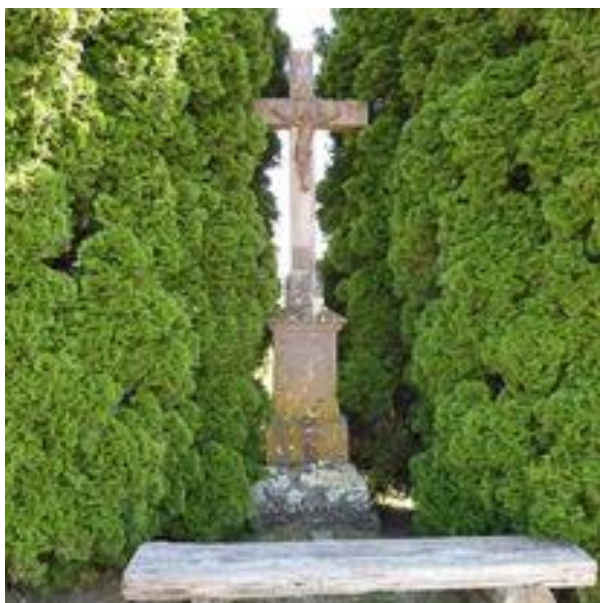
の城館の（日本風な数え方で）一階にハイデガー博物館が2002年から開設されている。彼の人生に即して彼の哲学の遍歴を4つの段階に分けて展示しており、その企画には、フライブルク大学の教授だったギュンター・フィガールが当たった。

教会の裏手には庭園があり、オークの木が列を並べてうっそうと陰を落としている。その西南の門の出口（下の写真）から、野の道は始まる。今では、その道はアスファルトで敷き詰められ、しばらくは左右に住宅の並ぶ小路にすぎないが、マルティン・ハイデガー・ギムナジウムという高校を過ぎたあたりから、左右に、トウモロコシ畑、麦畑、あるいはひまわり畑が広がる野中の道となっていく。サイクリングを楽しむひとたちがときおり通るほか、通る者がほとんどいないのどか



<sup>6</sup> 同上、631頁。

な道である。



数分歩くと、道が畑のあいだを進みはじめてまもないところにある分かれ道に建てられた案内板に「ハイデガーのベンチ」と紹介されているベンチがある。

私が訪れたのは夏の盛りの暑い晴れた日だった。あたりにはひまわりや野の花の甘い香りがほのかにただよい、音はといえば、花を求めて飛び交う蜂の小さな羽音だけであった。

ハイデガーは「野の道」のなかで、冒頭に記した箇所に続けて、こう記してい

る。

そのベンチの上にはときおり、偉大なる思索者たちのあれやこれやの書物がおかれた。ひとりの頼りなげな若者がそれらの書物をなんとか解説しようとしていたのだった。謎は次から次へと押し寄せ、逃れる道は差し出されない。そういうとき、野の道が助けとなった。というのも、野の道はわずかに開けた土地を通じている歩きやすい小道の上で静かに歩みを導いてくれたからである<sup>7</sup>。

---

<sup>7</sup> *Der Feldweg*, op., cit., S. 1.